

丹後半島の大型前方後円墳

—その築造原理を探る—

奥村 清一郎

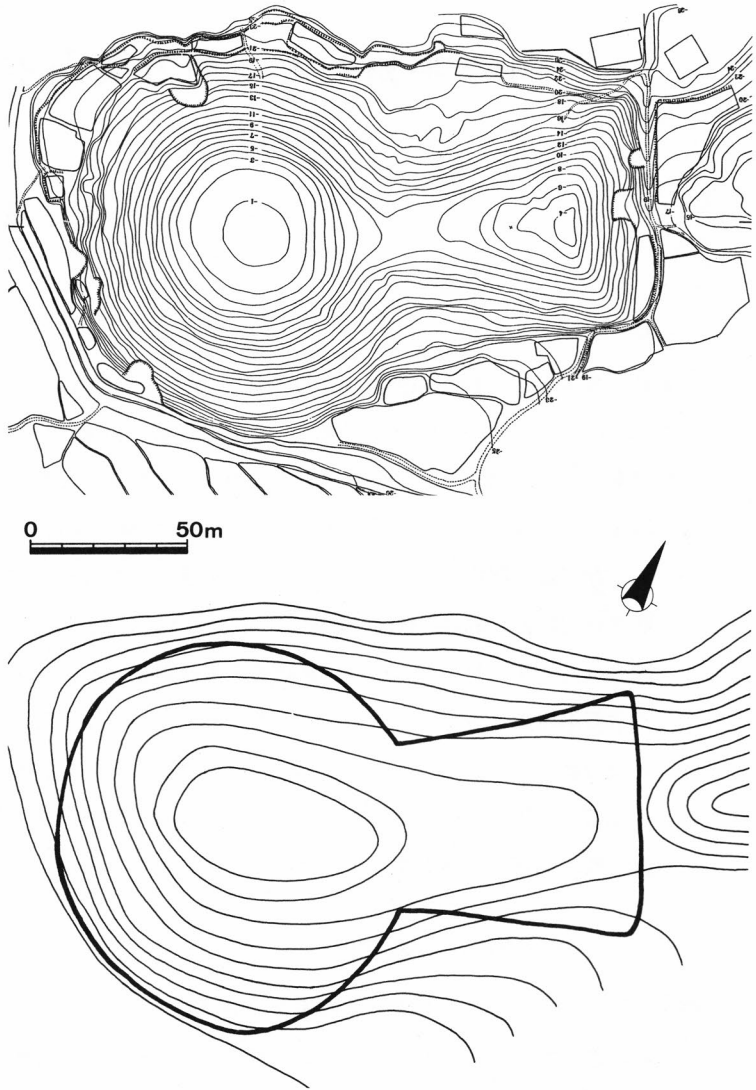
1 はじめに

丹後半島の北端部、竹野川の河口部に位置する丹後町神明山古墳は、全長180m級の竹野川水系では最大規模を誇る前方後円墳で、野田川水系の加悦町蛭子山古墳、福田川水系の網野町網野銚子山古墳とともに丹後三大古墳の一つに数えられる巨大古墳である。3段築された墳丘には埴輪・葺石を伴い、後円部の中心主体(堅穴式石室と推定される)から埴・合子・椅子などの石製模造品が、また前方部の頂部付近から布留式併行期の古式土師器が多数採取されている。築造年代は、古墳時代前期後半に求められている。その被葬者は、竹野川流域のみならず、丹後地方全域を統括する最高首長の座につくとともに、立地条件からみて日本海沿岸諸地域との交流についても重要な役割をはたした人物であったらしいことは、大方の認めるところである。本稿は、この神明山古墳を取り上げ、墳丘測量図の検討をとおしてその築造企画を解明し、ひいては古墳時代前半期に栄華を極めた丹後政権の勢力基盤・政治構造の一端を明らかにしようとするものである。

2 神明山古墳の墳丘にみる個性

神明山古墳の墳丘の特徴として、次の諸点を挙げることができる。まず第1に、舌状に延びる丘陵の端部を整形して営まれた、典型的な丘尾切断型の前方後円墳でその丘尾切断の仕方が、後円部を丘陵端部寄り、前方部を丘陵の尾根続きの側に配置し、前方部前端を切断して自然地形と古墳とを区別する工法をとっている点を挙げ得る。第2に後円部の平面形が正円をなさない。つまり墳丘主軸と直交する方向に長軸を、平行する方向に短軸をおく楕円形を呈している点が、本古墳の平面形の重大な特徴となっている。第3に、後円部の中心点—墳丘主軸と後円部長径との交点—が、基底部と墳頂部とで異なる。つまり、後円部の墳頂部の中心点—内部主体の中心点と同じである場合が多い—は、後円部の墳丘基底線の中心点と重ならず、いくぶん前方部寄りの位置にずれている、の3点である。つぎに、平面形についてみる。墳丘を対象とする発掘調査は行われていないのに加え、基底線・傾斜変換線の求め方は主観によって多少左右されるところがあるので、厳密な

議論には耐えないが、同志社考古学研究会による測量図から読み取った神明山古墳の平面規模は、次のとおりである。全長186m、後円部長径123m、後円部短径112m、くびれ部幅52m、前方部長74m、前方部前端幅78m。この平面形を比較検討するため、試みに後円部長径を100とした場合の後円部短径、くびれ部幅、前方部長、前方部前端幅の比率を指数化してみたところ、後円部短径が91、くびれ部

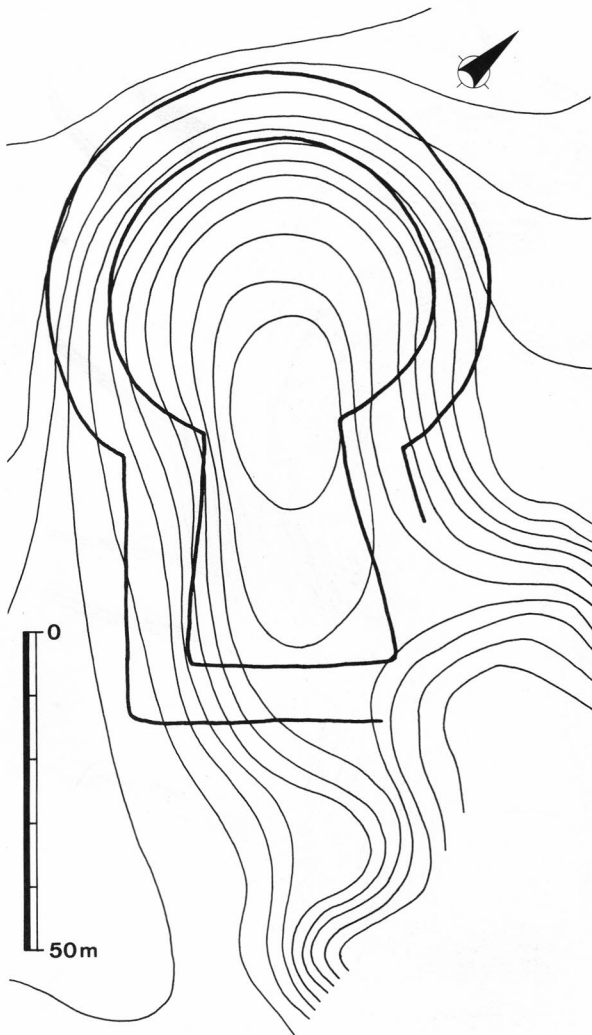


第1図 神明山古墳の現況測量図(上)と旧地形推定復元図(下)
(測量図は『同志社考古』10から一部改変の上転載。旧地形推定復元図の等高線は、2m間隔)

幅が42、前方部長が60、前方部前端幅が63という数値を得た。

3 黒部銚子山古墳との比較検討

黒部銚子山古墳は、竹野川流域では神明山古墳に次いで第2位の規模を誇る大規模な前方後円墳である。神明山古墳の後を受けて竹野川流域の首長権を継承した人物の奥津城とみられる古墳である。この神明山古墳と黒部銚子山古墳の両者は、直線距離にしてわずか



第2図 黒部銚子山古墳旧地形推定復元図
(『同志社考古』10掲載の測量図をもとに作成、等高線は1m
間隔)

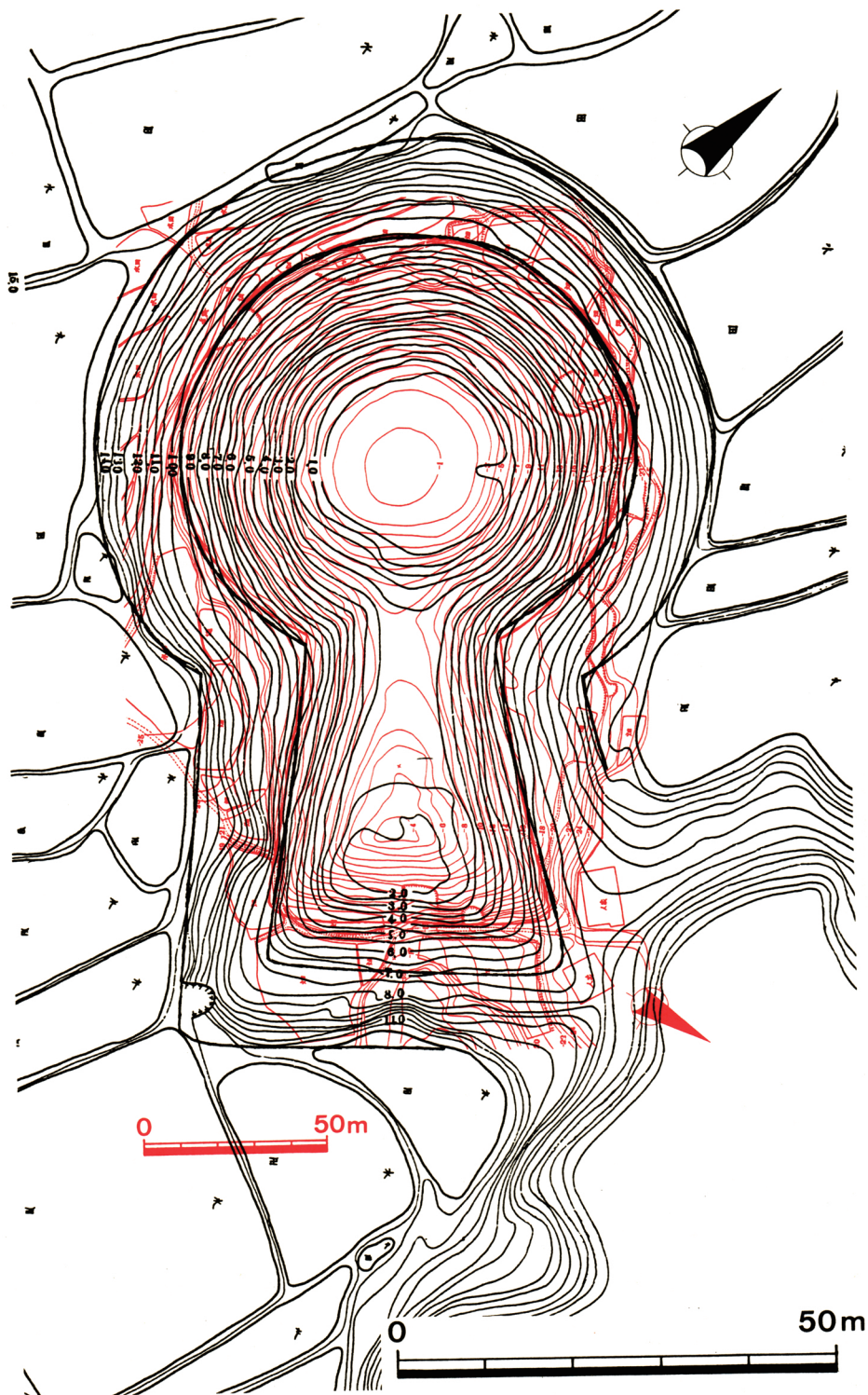
のと考えられる。後円部が主軸と直交する方向に長軸を置く楕円形を呈する第2の特徴および後円部頂部の中心が前方部寄りにずれる第3の特徴についても、黒部銚子山古墳の墳丘測量図から読み取ることができる。

墳丘の規模は、全長102m、後円部長径70m、後円部短径65m、くびれ部幅44m、前方部長37mを測る。しかし、墳丘基底線の平面形は、後円部の比率(後円部短径指数93)を除いて、神明山古墳と比較してさほど類似点は見いだせない。前方部については、前端部での幅を地形図のうえでは確定できない。それは、前方部右隅部の自然地形との切り離しがき

5.3kmを隔てるに過ぎない。

同じ竹野川下流部の右岸に位置し、ともに丘尾切断型の前方後円墳で段築・埴輪・葺石の外表施設三要素を完備すること等、共通する要素を多く備えていることから、墳形についても従来から神明山から黒部銚子山へと変遷していったと考えられてきた。この点について、以下、具体的に検証してみよう。

第1の特徴である、丘陵の尾根続きの側に前方部を配置するという丘尾切断の工法を採用する点については、両者は共通している。さらに、両古墳の墳丘の基底部とくに後円部は、竹野川本流の沖積地との比高差わずか数メートルを数える低レベルの位置に設けている。これは、葺石や主体部構築用石材、埴輪などの資材の運搬にあたって、竹野川の水運の利用を考慮したも



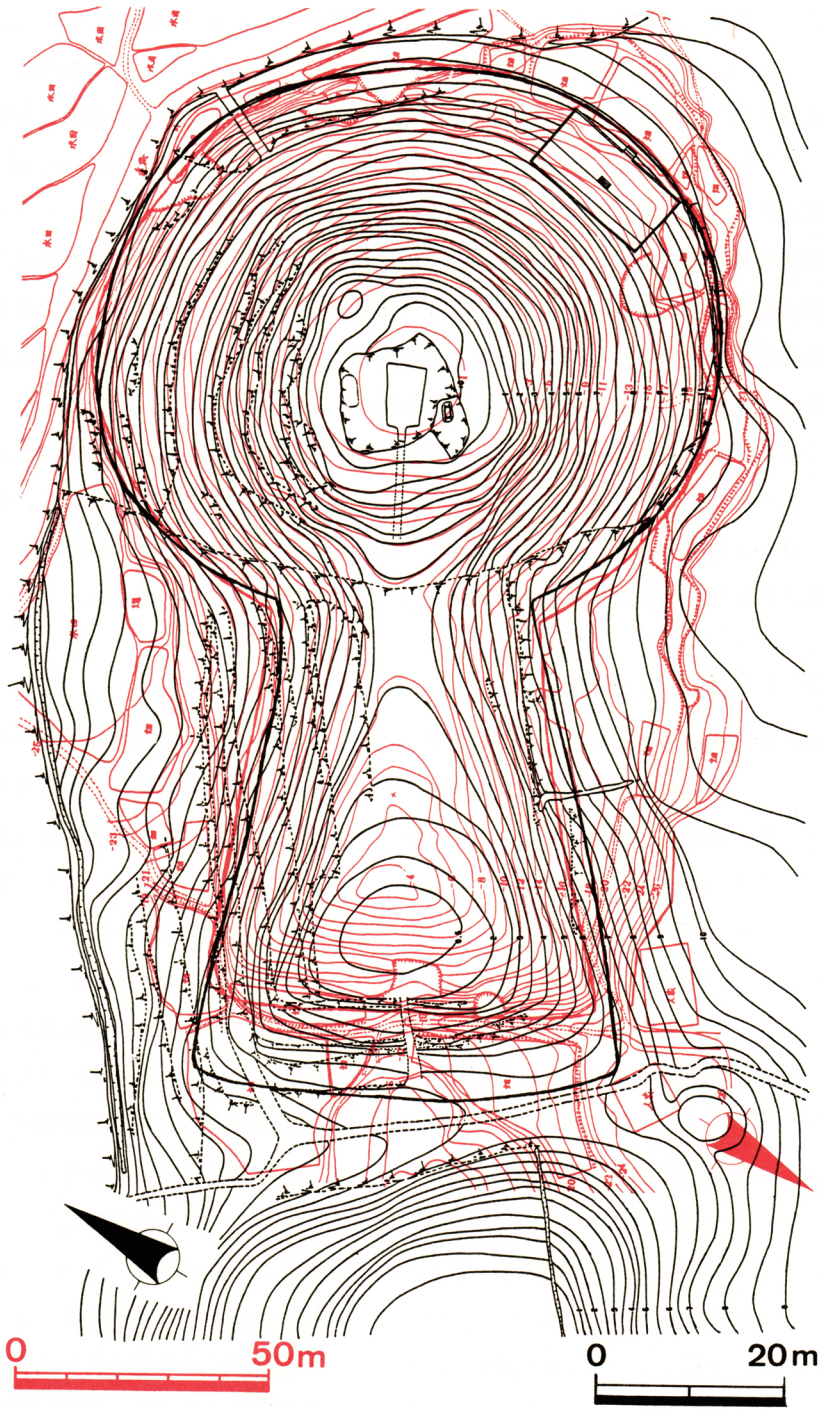
第3図 黒部銚子山古墳(黒)と神明山古墳(赤)

わめて甘く、墳丘の段築第1段目の等高線は全て完周せずに背後の丘陵側に回り込んでしまっているため、正確には第1段目の墳丘は前方後円形を成していない点に起因しているものと思われる。おそらくこれは、地形上の制約にもかかわらず、予定の規模の古墳を築こうとしたために、やむなく第1段目の墳丘は、前方後円形として完結するのをあきらめ、第2段目以上の墳丘を乗せるための基台部としての機能を充たす程度の工事にとどめたものと推測される。そこで、その基台部の上の前方後円墳、すなわち第2段目以上の墳丘と神明山古墳との比較検討を試みてみた。平面規模は、次のとおりである。全長83m、後円部長径52m、後円部短径47m、くびれ部幅22m、前方部長36m、前方部前端幅33m。後円部長径を100とした場合の各部の寸法の指数は、後円部短径が90、くびれ部が42、前方部長が69、前方部前端幅が63となる。前方部長指数を除くと、黒部銚子山と神明山は極めて近い値を示していることがわかる。すなわち、黒部銚子山古墳の2段目以上の墳丘プランは、神明山古墳をほぼ5分の2に縮小した相似形プランを基本とし、前方部の長さのみを全長比約6パーセント付加して出来上がったものであることがわかった。

4 北山1号墳との比較検討

神明山古墳と類似の築造企画による前方後円墳を、主に日本海沿岸諸地域のなかで探し求めたところ、その有力な候補として浮かび上がってきたのが、鳥取県東伯郡東郷町にある北山1号墳である。5世紀前半代に成立した、山陰地方では最大規模を誇る前方後円墳で、馬山4号墳(4世紀後半)の後を受けて伯耆地方を統括する王の地位についての人物の墓とみられている。この北山1号墳と神明山古墳との類似点は、つぎに述べるとおりである。

前方部前端で丘陵の尾根を切断して墳丘を築成する丘尾切断方式の墳丘築造工法は、神明山古墳の第1の特徴として挙げたもので、両者共通している。つぎに、後円部が正円を成さず、墳丘主軸と直交する方向に長い楕円形プランを呈するという神明山でみられた第2の特徴についてみる。墳裾線を後円部後方で-11.5m等高線付近、側面部で-12m等高線付近に求めるならば、等高線が直線的に走る部分—梨畑による改変を受けてはいるが後円部ではなく前方部に含まれるとみるのが妥当と思われる—との位置関係からみて、後円部は本来主軸と直交する方向に長い楕円形に造られたことがわかる。後円部の頂部平坦面は、大規模な既掘坑の存在によって、旧状をとどめていないが、発掘調査によって中心主体の位置・規模などが明らかにされており、この墓壙の中心点を墳頂部の中心点に求めるのが妥当と考えられる。こうして求められた後円部頂部の中心点と、さきに求めた墳裾線の中心点とを比較すると、明らかに前者のほうが前方部寄りにずれており、神明山で指摘した第3の特徴についても認めることができた。つぎに前方部の形状復元を試みてみ



第4図 北山1号墳(黒)と神明山古墳(赤)

よう。前方部前面の墳裾線は、-6.5m等高線付近に求めることができる。前方部幅の復元については、前方部側面の墳裾線を-11.5m等高線付近に求め、後円部径に近い値(88m)とする報告書の見解もあるが、もしそうした場合、前方部の両隅部と前方部前端線とをつなげるには、前方部前端線は等高線と直交せざるをえなくなり、不自然である。やはり右隅部で-6.5m等高線付近、左隅部で-7.5m等高線付近に墳裾線を求め、それ以下のレベルで認められる前方部状をなす地形については、墳丘を乗せるための基台部の整形によるものと解釈するのが妥当と考えられる。

以上の検討を経て推定復元される北山1号墳の墳丘の平面規模は、以下のとおりである。全長107m、後円部長径66m、後円部短径57m、くびれ部幅28m、前方部長50m、前方部前端幅46m。後円部長径を100とした場合の各部の寸法の指数は、後円部短径が86、くびれ部幅が42、前方部長が76、前方部前端幅が70となる。この結果、北山1号墳の墳丘プランは、神明山古墳のほぼ2分の1の相似形プランを基本形とし、前方部の長さを全長比約11パーセント付加して出来上がったものであることがわかった。

5 神明山古墳から黒部銚子山古墳、北山1号墳へ

神明山、黒部銚子山、北山1号の3古墳の規模と墳丘各部の指数は第1表のとおりである。後円部長径と短径の比率およびくびれ部幅の比率は、3者ともほぼ同一の数値を示している。前方部長指数は、神明山、黒部銚子山、北山1号の順に大きくなっており、前方部前端幅指数は、神明山・黒部銚子山が等しく、北山1号がやや大きい値を示している。この前方部の長大化に注目すれば、神明山古墳、黒部銚子山古墳、北山1号墳の編年的序列を想定することができ、伴出遺物その他の所見からの年代観とも矛盾しないことがわかる。あえて絶対年代をあてはめてみるならば、神明山古墳(4世紀後半)、黒部銚子山古墳(5世紀前半)、北山1号墳(5世紀前半)となろう。

この前方部の長大化は、無原則に図られたのではなく、神明山古墳の墳丘プランを基本形とし、黒部銚子山古墳(2段目以上)では前方部前面の緩斜面化、北山1号墳では丘尾切

第1表 神明山古墳、黒部銚子山古墳(上段)、北山1号墳の規模一覧表

古墳名	全長	後円部長径 同指数	後円部短径 同指数	くびれ部幅 同指数	前方部長 同指数	前方部前端幅 同指数
神明山古墳	186m	123m 100	112m 91	52m 42	74m 60	78m 63
黒部銚子山古墳	83m	52m 100	47m 90	22m 42	36m 69	33m 63
北山1号墳	107m	66m 100	57m 86	28m 42	50m 76	46m 70

断位置の変更といった前方部先端部の部分修正により行われたものであるらしいことは既に記したとおりである。こうしてみると、この工法は、同じ設計図をもとに、最小限の掘削土量でより墳丘を大きく見せるための、最も現実的かつ簡便な工法であったことがわかる。

以上の検討から、神明山古墳、黒部銚子山古墳、北山1号墳の3古墳は、同一系統の築造企画のもとに築かれていることが判明した。神明山古墳から黒部銚子山古墳への設計図の伝播については、同一河川流域の首長墓系譜を形成するとともに、墓域を近接または同じくする位置関係からも容易に理解し得るところである。

つぎに神明山古墳の墳丘プランが、一部改変の上、北山1号墳に採用されたことを裏づける2・3の傍証を掲げておきたい。神明山古墳周辺の沖積地に潟湖の存在を推定復元する森浩一氏の見解に従えば、古墳の眼下に湖水、そのむこうに日本海を見下ろす丘陵上に立地するという点において両者は共通している。また、神明山古墳の前方部の頂部付近からは、布留式の土師器に混じって、おびただしい数量にのぼる山陰系の古式土師器—搬入品を含む可能性が高い—が出土している。いずれも表採資料のため、前方部埋葬施設に伴う供献土器群か祭祀に伴う土器群か詳細は不明だが、神明山古墳の築造にあたって、山陰系の人物がなんらかの形で関与していた公算は極めて高いものと推測される。神明山古墳の眼下の潟湖(推定地)と日本海の間には、砂嘴が延びており、その上に竹野遺跡がある。この竹野遺跡は、弥生前期の遺跡として著名だが、その後断絶し、古墳前期に再度人が住みつけた形跡をとどめている。この古墳前期の竹野遺跡からも多量の山陰系の古式土師器が出土している。この地は、山陰系の人々が海路を用いて神明山古墳築造に関与する場合のキャンプ地としては、好適な立地条件を備えたところといえるだろう。

6 おわりに

以上に述べたように、神明山古墳と黒部銚子山古墳、神明山古墳と北山1号墳の間に、首長権の継承および政治的諸関係の存在をそれぞれ想定することができた。後者については、神明山古墳の被葬者は、伯耆・因幡地方の地域政権と海路を通じて一定の同盟・連合関係を結ぶことによって、丹後政権の最高首長の座に就任しえたのではないかという結論を導き出すことができた。

(おくむら・せいいちろう=当センター)